

## クリのせん定法に関する研究

## 第 1 報 結果母枝数と樹の生育・収量

酒井彰一・坂井健輔・岡田真治・\*益田信篤 (熊本県果樹試験場・\*熊本県球磨農業改良普及所)

Syoichi SAKAI, Kensuke SAKAI, Sinji OKADA and Nobuatsu MASUDA: Method of Pruning for Chestnut.

## 1. Number of Fruiting Shoots in relation to Growth and Yield of a Chestnut Tree

クリは熊本県の落葉果樹の中でも大きな地位を占めているが、多くの園で放任栽培に近い状態のため、樹勢の衰弱や収量の不安定を招いている。この対策としては、樹勢の安定および優良結果母枝の確保が重要であり、そのためには整枝、せん定はかかすことができない。本試験では、せん定の強さの程度が樹体および収量に及ぼす影響を調査し、適切なせん定程度を検討した。

## 1. 試験方法

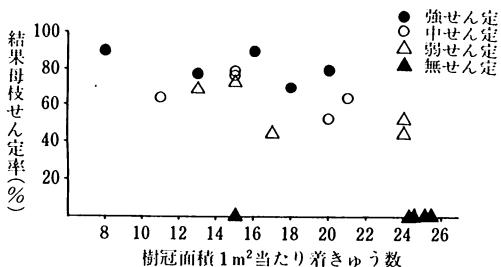
1978年、7年生の筑波を用い、一樹当たり結果母枝数を強せん定区100本、中せん定区200本および弱せん定区300本に制限し、樹の生育、収量および品質等を調査した。なお、せん定程度は毎年同じとし、樹高および樹冠の制限は特に行わなかった。対照区として、無せん定区を設けた。また、結果母枝は基部径5mm以上、長さ30cm以上とし、徒長枝および着穂部位以上が極端に細くなったものは除外した。

## 2. 結果および考察

1) 樹の生育 せん定程度の差による樹体への影響は幹周よりも樹高および樹冠面積に表れ、せん定程度が弱いほど樹高が高くなるのが早く、樹冠の拡大も早かった。その差は14年生時で、強せん定区と弱せん定区、約3年である。結果母枝の資質は、せん定程度が強いほど良かった。せん定前の結果母枝数は、せん定程度が弱いほど多い傾向にあったが、各区とも10年生を過ぎるころから急

第 1 表 樹冠占有面積の推移 (m<sup>2</sup>)

	1977	1981	1984
強せん定	17.0(100)	36.4(214)	55.7(328)
中せん定	18.1(100)	45.0(249)	59.9(331)
弱せん定	23.6(100)	48.8(207)	85.2(361)
無せん定	21.7(100)	58.0(267)	79.9(368)



第 1 図 結果母枝せん定率と着きゅう数の関係

激に増加した。

2) 収量および品質 樹冠占有面積 1 m<sup>2</sup> 当たりの着穂数はせん定程度が弱いほど多かったが、1 m<sup>2</sup> 当たりの収量は逆にせん定程度が強いほど多くなった。累計収量は10年生時までは無せん定区が最も多かったが、それ以降は弱せん定区が最も多くなっている。充実果率および2 L ~ 3 L 率はせん定各区の間に一定の傾向はみられなかったが、無せん定区はせん定各区と比べて、いずれも悪くなっている。

3) その他 クリタマバチ寄生率は、せん定各区分は6 ~ 12%で、特に一定の傾向はみられなかったが、無せん定区は26%近くと、非常に寄生率が高い。また、せん定時間はせん定が強いほど、短くなっているが、これは樹高との関係が高い。

本試では結果母枝数を固定して行ったが、これらの結果を総合すると、7 ~ 8年生以降のせん定は、結果母枝数の約30 ~ 40%程度、本数にして約200本、10年生以降で約300本残す程度が最も望ましいと思われる。ただし、適正樹冠占有率の維持と樹高の制限も考慮しなければならない。

第 2 表 せん定前結果母枝本数および基部径

	1977	1981	1984	基部径
強せん定	223	329	982	9.3mm
中せん定	279	370	844	8.6
弱せん定	324	582	956	8.4
無せん定	315	477	775	6.6

第 3 表 収量および品質 (1978 ~ 1984 平均)

	樹冠面積 1 m <sup>2</sup> 当たり 着球数(個)	樹冠面積 1 m <sup>2</sup> 当たり 収量 (g)	充 実 果 率 (%)	2 L ~ 3 L 率 (%)
強せん定	15.5	476	53.6	91.8
中せん定	16.3	405	46.9	88.0
弱せん定	18.6	414	48.5	91.6
無せん定	22.8	307	44.0	84.6

第 4 表 クリタマバチ寄生率およびせん定時間

	クリタマバチ 寄生率 (%)	せん定 時間 (分)
強せん定	6.1	38.0
中せん定	12.1	43.1
弱せん定	9.1	52.7
無せん定	25.7	—